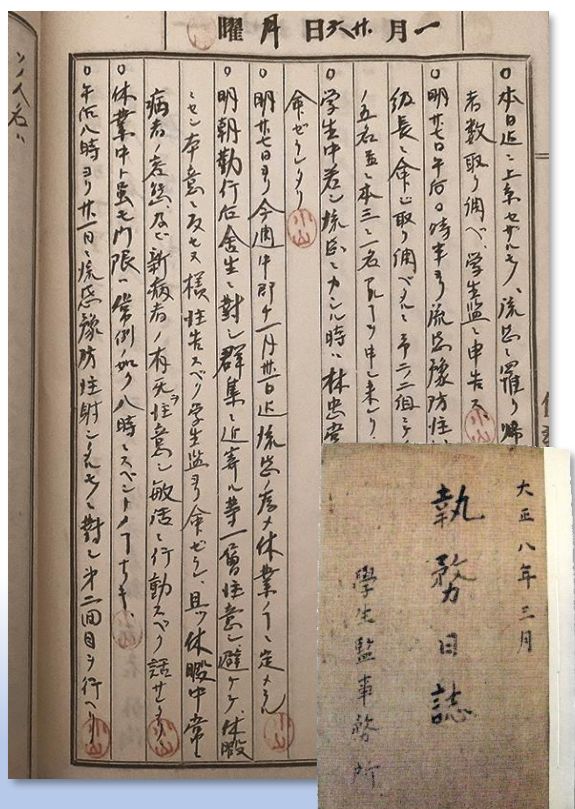
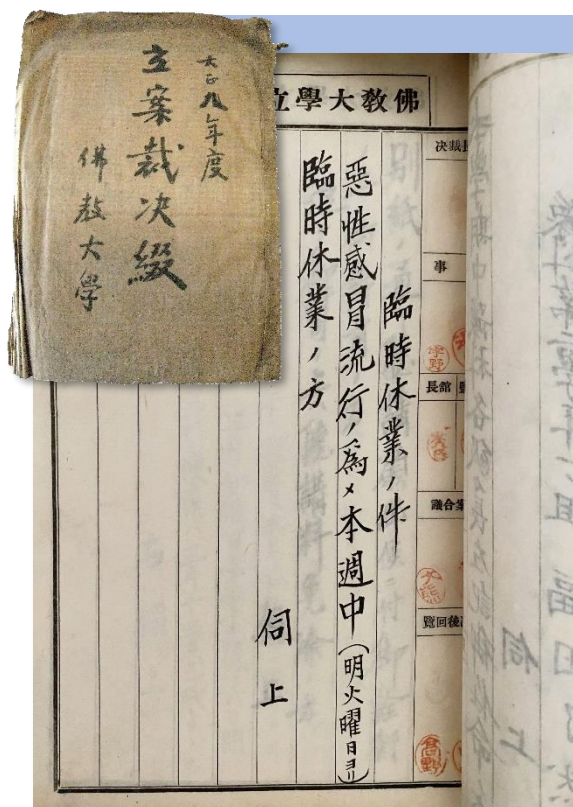




『大正八年三月 執務日誌』



『大正八年度 立案裁決綴』

## 目次

|                                    |      |      |
|------------------------------------|------|------|
| 学生たちが関わったまちづくり活動－河川環境の改善と京都の地蔵盆行事－ | 窪田和美 | 2    |
| 龍谷大学と私                             | 龍溪章雄 | 6    |
| 『学林諸記』三 天保九年（一八三八）六月～七月            |      | I～VI |
| 表紙解説・資料室だより                        |      | 16   |

# 学生たちが関わったまちづくり活動

## ー河川環境の改善と

### 京都の地蔵盆行事ー



くぼた かずみ

龍谷大学名誉教授 窪田 和美

#### はじめに

龍谷大学は、従来から地元地域とさまざまな取り組みを展開してきた。それは真宗の教えに通じる姿勢でもあろうが、学生にとって実社会における異世代との交流は、多くの気づきと思考を深める貴重な機会である。座学といわれる講義やレポートとは違って、活動を通じて得られた達成感は自信につながり、学生を成長させる。地域活動に参加した学生が、将来、どこかの地域で課題解決のため、活躍してくれることを密かに願っている。

ここで紹介するのは、短期大学部の学生が地域住民や高校生と実践してきた5年間のまちづくり活動である。人々を遠ざけていた河川は、学生たちと地域住民による伝統行事の継続を機に注目されるようになってきた。河川清掃と「竹灯籠」の点灯が、ゆるやかな啓発となり河川環境が改善に転じただけでなく、この活動がきっかけとなり町内では、「地震時避難マップ」の作成へと発展した。

地域におけるまちづくり活動にとって、大切なことはどのようなことを考えてみたい。

#### 1. 京都の伝統行事「地蔵盆」と東高瀬川の課題

京都には江戸期から盛んになったとされる地蔵盆という行事がある。子どもを守ってくれるという地蔵菩薩の縁日に年に一度実施される子どものおまつりである。かつては町内の子どもたちが、年齢の違いを超えて一日中お地蔵様の前で遊んだという。子どもにとっては、夏休み最後の嬉しいおまつりである。京都発祥の地蔵盆は市街地では次第に減少しつつあるが、かつての新興住宅地であった伏見区深草周辺では、今も盛んに行われている。

学生たちの活動場所となる川久保町は、約130世帯の町内で、すぐそばを東高瀬川が流れている。その河川敷に「地蔵菩薩の祠（お地蔵さん）」が鎮座している。だから、この河川敷が地蔵盆の会場となるが、近年この川には空き缶やペットボトル等不法投棄のゴミが目立ち、人々を寄せつけない川となっていた。

昭和の頃の地蔵盆会場は町内の中心地にあり、そこで盆踊りもあったというほど、多くの大人や子どもで賑わったという。そして素掘りの浅い川は、子どもたちの格好の遊び場だった。しかし、近年の地蔵盆は、少子化による参加者の減少や役員の高齢化に加え河川環境の悪化が相俟って、僧侶のお勤めが終わると子どもたちにお菓子を配るだけというようにすっかり形骸化し、様変わりしてしまったという。

## 2. 地蔵盆行事のボランティアから河川環境の改善へ

当初、地蔵盆の活性化には、学生が子どもたちと役員（高齢者）との「橋渡し役」になれば、プログラム企画や運営の促進につながると予想していた。しかし、東高瀬川に対するゴミの不法投棄という負のイメージが活性化を阻止しているのではないかと考えるようになった。

学生が関わったまちづくり活動は、2014年8月に行ったある男子学生による地蔵盆のボランティア参加に端を発している。9月頃、一通の手紙が大学に届いた。手紙は川久保町の子どもたちからで、「今年の地蔵盆は大学生が来てくれて、とても楽しかった、だから来年も是非来て欲しい、待っています」と記されていた。地蔵盆を知らない学生は、伝統行事を経験した喜びと子どもたちと遊ぶ楽しさをも実感して、「自分も楽しかったから、お礼を言われるなんて・・・」と戸惑っていた。

地蔵盆を活性化するために学生たちが参加すれば、子どもたちと高齢者の橋渡し役となり、会場は盛り上がるに違いない。しかし、河川環境の悪化が地域住民を遠ざけているとしたら、非日常的な地蔵盆を活性化するだけでなく、日常的な環境改善の活動を解決してこそ学生は成功体験を実感できるのであり、そのためには、学生の発想で地蔵盆プログラムの企画・運営に関わり、河川環境の改善というまちづくり活動にも参加したい旨を町内会に伝えて、その承諾を得た。学生が実社会において異世代の人たちと行動を共にすることで、かれらの学校文化とは異なったコミュニケーション能力の向上にもつながるであろうと期待した。

## 3. 河川環境の改善課題に向けた学生・地域住民・高校生の活動

学生たちの発想で地蔵盆プロジェクトを企画・運営するため、活動支援金が交付される大学コンソーシアム京都<sup>(1)</sup>の「学まちコラボ事業」<sup>(2)</sup>に応募することにした。学生のプレゼンテーションが審査され、2015年度から毎年継続して5年間採択されたのである。6月の公開プレゼンテーションと3月の報告プレゼンテーションは、「短大生ながら4年制の学部生と比しても堂々たるものであった」と審査委員からお褒めを戴いた。学部生や大学院生を含め毎年約30団体が採択され地域で活動しているが、2017年度には「最優秀賞」を受賞しトロフィーと賞金の獲得ができた。5年に渡る活動を継続できたのは、住民のために楽しいプロジェクトを企画・運営して地域を活性化しよう、という学生たちの前向きな態度だった。

他方、伏見工業高等学校<sup>(3)</sup>の生徒たちが、東高瀬川周辺のまちづくり学習をしていることを知らされた。担当教諭との折衝の結果、共にまちづくり活動をしていくことになった。まちづくり活動は地域の課題を解決に向ける一つの方策であり、さまざまな分野からの接近が可能である。高校生の工学（建築・土木）の知識と短大生の地域社会に関する考察を統合することで興味深い成果がみられるであろうと期待していた。

最初の連携活動は、これまで高校生と住民有志が継続してきた河川と周辺の一斉清掃である。学生・高校生・地域住民が総勢100名余りで河川清掃を実施し、それが地域話題となれば、今後の活動もスムーズに進行すると思われた。さらに、河川周辺の住民で構成する「砂川学区東高瀬川を美しくする会」は、ホタルの幼虫を飼育・放生する「ホタルの夕べ」を毎年6月初旬に開催している。河川の水質が良好なので、カワニナが生息すればホタルの餌となり、ホタルの乱舞も夢ではないという。地蔵盆プログラム、一斉河川清掃、ホタルの飼育・



放生これらは、環境改善への意識改革を求める手だてでもあった。

河川へのゴミの不法投棄は河川環境を悪化させ、動植物の生態に悪影響を及ぼすが、その防止策として不法投棄禁止の看板や張り紙は、最初は注目されるものの、時間の経過とともに、景観の一部になってしまう。したがって決して効果的な抑止力にはならない。そこで、河川に対するポジティブイメージを形成するため、地蔵盆プログラムを用いた抑止の仕掛けづくりが必要だと考えた。諸々の仕掛けを通じて環境改善を図ることを求めたのである。

#### 4. 学生参加の地蔵盆に対する住民感情

イベント活動がはじめてという学生は、子どもの頃に経験した「地域の夏まつり」からプログラム企画を考えてきた。町内の高齢者から「足が悪いから地蔵盆会場まで行けない」との声を聞き、それなら学生と子どものグループが高齢者宅を訪問するというクイズラリーを考えた。これは学生にとって、参加する側から企画・運営する立場への転換であり相手の立場に立って考える態度が修得できた一例である。

ところが、地蔵盆初日の役員挨拶の中で、学生たちが出鼻を挫かれる事態が起こった。それは「この町内の地蔵盆は私たちが長年続けてきたのだから、他所から来た学生に勝手なやり方をされるのは困る」との声が出た。その場は別の役員が取り成したため、その後の休憩時間を挟み、以後は予定通り進行した。当日になってこのような発言があると、意見として理解できない訳ではないが、足が竦み気持ちまで落ち込んでしまうという、学生には稀な経験であったが、世の中にはさまざまな考えがあることを学んだと言えよう。

地蔵盆における僧侶のお勤めは、子どもにとっては退屈な時間である。一人の幼児が立ち上がろうとしたその瞬間、そばにいた学生がその子の耳にスマートフォンからイヤホンで音楽を聴かせた。周囲の大人には思いつかない機転の利かせ方だったと、あとで親御さんから喜ばれた。このようなエピソードは、終わってからいくつも聞かされた。このように、振り返れば微笑ましい光景もみられたが、まさに学生は、実社会を通して貴重な成功体験を獲得したのである。

#### 5. 地蔵盆夕刻に東高瀬川を照らす手作りの竹灯籠

初年度から毎年継続しているのは、夕刻に東高瀬川の河岸に並ぶ「竹灯籠」である。あたりの暗闇に竹灯籠がぼんやり浮かび上がり、ちょっと幻想的な雰囲気醸し出す。この竹灯籠は、京都市立京都工学院高等学校校庭に自生する青竹を使用して、高校生・学生・地域住民が協力して、毎年 200 個くらいを手作りしている。

学生たちが関わった 5 年間を通じて、河川環境は確実に良くなった。地蔵盆開催前に行う河岸の草刈りと河川清掃の際に出てくる空き缶やペットボトル等は減り、ゴミ回収の袋が毎年減少してきた。

そして例年 6 月には「東高瀬川を美しくする会」が、ホタルを飼育・放生させ、地蔵盆夕刻には学生たちが竹灯籠を並べて河岸を照らしている。このような活動が、近隣住民に定着してきたのであろう、かつて人々を遠ざけていた東高瀬川は人々の集う場所が変わってきた。この川に対する地域住民の意識がしだいに良い方向に向かったと言える。学生・高校生・地域住民による活動が、「ゆるやかな意識改革」を醸成したのであり、看板や張り紙とは異なった効果がみられた。まちづくり活動にこそ、当初の意図どおりこのような穏やかな抑止力が相応しいと思われる。

#### おわりに

地蔵盆行事の活性化から始まった活動は、学生・高校生や地域住民との活動を経て、東高瀬川の環境改善という一定の成果をもたらした。その後、環境改善は各地で発生した大規模

災害を教訓に、川久保町自治会の地震時避難マップの作成へと発展していった。

まちづくりとは、地域住民が主体的に行動することで展開する活動である。学生たちは、まちづくりの関わりを通して、次世代の地域住民として何をすべきかとの貴重な学びを得ることができ、やりがいを感じ充実感に溢れていた。他方、地域の人たちは、「若い人と活動すると、元気をもらえるのでとても楽しい」と異口同音に話された。

地域社会に暮らす誰もが、「この地域で快適に暮らしたい」という意識を持っていれば、「より楽しく、より快適にするには…」と発想することになる。地域が快適になれば、愛着と誇りが持てるようになるだろう。今回の河川環境の改善活動は、地蔵盆が活性化して、ホテルが飛ぶような河川に変化してきた。このようにして一つひとつの課題を解決していくことで、地域をもっと良くしたいと考える人が増えることを期待したい。その思いと活動が蓄積されることで、まちづくり活動はより発展するに違いない。

#### 注釈

(1) 正式名称は、公益財団法人大学コンソーシアム京都という。京都地域の大学間連携を図り、加盟大学・短期大学の教育・学術研究の向上とその成果を地域社会に還元し、地域の発展と活性化に努め、京都地域の高等教育の発展と社会をリードする人材育成を目的とする団体である (<https://www.consortium.or.jp/>)。

(2) 大学・学生と地域が『コラボ』して京都のまちづくりや地域の活性化に取り組む企画・事業に支援金を交付し、取組を支援する「大学地域連携創造・支援事業（愛称：学まちコラボ事業）」のこと。大学にとっては実践的な教育・研究機会の確保による人材育成などを、地域にとっては大学の知や学生の活力による地域の課題解決や活性化を図ることを目的として 2004 年度から継続実施されている (<http://www.gakumachi.jp/>)。

(3) 京都の公立工業高等学校である。但し、2016（平成 28）年 4 月、京都市立の別の工業高等学校と統合して京都市立京都工学院高等学校と名称変更され、当時の校地から約 3 km 山側に移転した。高校移転後も地域活動の連携は継続して実施してきた。この移転地には校庭に青竹が自生しており、その青竹の提供を受けて地蔵盆プログラムの準備に際して、「竹灯籠」を手作りするなど、多大な功績をあげる結果にも繋がった。

# 龍谷大学と私



龍谷大学名誉教授 たつだに あきお  
龍溪 章雄

## はじめに―半世紀に及ぶ龍谷大学とのご縁―

1985（昭和 60）年 4 月、私は専任講師として短期大学部に着任した。爾来、短期大学部では 20 年間、その後、短大仏教科（専攻科）の廃止にともない 2004（平成 16）年 4 月文学部に移籍してからは 15 年間、自身の母校でもある龍谷大学にお世話になった。35 年の長きにわたり、歴史と伝統のある大学の教員として教育研究に携われたことを、文字どおり有難いご縁と受けとめている。

2020（令和 2）年 3 月末日、深草学舎顕真館において退職辞令交付式があった。入澤崇学長から労いの言葉を頂戴し、大学関係者に温かく見送られて大学をあとにしたことである。学生時代等を含めるとちょうど 50 年、実に半世紀に及ぶ龍谷大学とのご縁……、そしてお別れであった。

このたび、大学史資料室から、『龍谷大学史報』に掲載する「在職当時の思い出話」に関する原稿を依頼された。そこで、短大時代、文学部時代に分けて、それぞれの時代の一頁を抜き書きしてトピック風に綴り、また「大学史」執筆をめぐる経験の一端を書き添えることとする。

## 短期大学部時代―専攻科学位授与機構認定申請業務余話―

私の大学（文学部仏教学科真宗学専攻）入学は 1970（昭和 45）年で、当時は高度経済成長期の直中にあった。そしてその延長として 1980 年代に入るとやがてバブル景気へと進んでいく。また、18 歳人口増を背景に大学進学率の上昇という社会状況があった。それを受けて龍谷大学の臨時定員増があり、短期大学部でも定員増を見ることとなった。併せて、短大教育展開策の一環として「専攻科」が設置されるに至る。専攻科とは、短大 2 年間の修業年限

を終えた後、さらに2年間専門的・実践的に勉学研究を志す者を対象にした制度である。仏教科を基盤とする「専攻科仏教専攻」は1985年に開設された。仏教科の定員増、そして専攻科設置という大学の施策のもと教員増も図られて、私の就職が実現したわけである。この時、仏教科にもう一人専任として、龍口明生先生（仏教学）が着任されている。

ところで、仏教科入学生の中には4年制学部（文学部）への編入を希望する者が毎年一定程度以上見られた。しかし、編入枠には上限があり（数名）、希望が叶えられ難い状況であった。また編入はともかくとして、さらに専門的・実践的な研究を望む者もいた。そうした学生にとって、専攻科で学んだ証しとして4年制大学卒業同等の資格を与えられることは、勉学の励みとなる。当時、そうしたニーズの受け皿として、文部省は専攻科を対象とする学位授与機構を設立、その修了者には4年制大学卒業と同等の学位を授与するという短大教育政策を展開していた。この学位授与機構に4年制学部同等の教育課程として認定されるためには、改めて現専攻科のカリキュラムの充実策を図るとともに、教員の研究教育業績の審査を受ける必要があった。

そうした認定を受けるための準備と手続きに、私は仏教科、専攻科仏教専攻の教務として携わることとなる（当初は川添泰信先生がご担当）。社会福祉科の方のご担当は若原道昭先生であった。大阪、東京の学位授与機構認定専攻科を有する短期大学数校に資料収集のため若原先生と2人で、また文部省にも数回、当時の短大学部長志水宏行先生と3人で、それぞれ出張したことは、今でも記憶に新しい。

各授業科目担当予定者から提出された「講義内容」（当時は「シラバス」という今では当たり前になったカタカナ語はまだ使用されていなかった）を、学位授与機構申請の趣旨と認定基準に照らしてそのすべてにわたって再度点検し加筆修正したこと。学位授与機構への書類申請の日が切迫していた関係で、事務長（今の教務課長）や課員、若原先生たちと印刷所に籠ってゲラ校正に追われたこと。そして何よりも、提出後に書類予備審査を受けるため学位授与機構本部（当時横浜市郊外の東京工業大学内に置かれていたと記憶する）へ行くも、短期大学部長の印鑑を京都に忘れてきたことに気づき、慌てて横浜市内の店舗に飛び込んで急ぎ作製してもらい事なきを得た、という笑い話。それらのことが走馬灯のように想起される。1994（平成6）年4月、学位授与機構認定校に昇格した。

短期大学部仏教科、専攻科の歴史については、『飛翔—大いなる歩み—』最終（第30）号（龍谷大学短期大学部、2001年刊行）の巻頭に、「序—短期大学部五十年の歩み」として当時短期大学部長であった若原先生がまとめておられる。また「龍谷大学史報」（vol.6、2006年3月20日発行）に掲載の、朝枝善照先生の「龍谷大学短期大学部仏教科—その創設から解消まで—」も、参考になる。詳細はそれらに譲りたい。

一点付言しておきたいことがある。専攻科の学位授与機構認定が学生に大きな希望を与えたことは間違いない。しかし一方で当時、価値観が多様化し多方面にわたり複雑性を示す時代社会の動向と諸問題を的確に分析把握し、これに宗教者として高度な研究に基づく時代即応の実践をもって応答していける人材の養成が、宗教界では年を追うごとに喫緊の課題となっていた。そうした人材の養成を狙いとする課程を既設の文献研究センターの文学研究科（真宗学専攻）とは別枠で構想し、当時の信楽峻麿学長（在任期間：1989年～1995年）に上申するということがあった。いわば専攻科の大学院バージョンである。ある日、お互い帰路に就く京阪電車の中で、当時短大におられた矢田了章先生から初めてその青写真をお聞きし、後日提出文書作成に幾分か協力させていただいた。しかし当時は時期尚早だったのか、実現できなかった。後年、文学部に移籍されていた矢田先生が構想を練り直されて、やがて「現代社会の諸問題を解決できる宗教的実践のスペシャリストの育成」を教育理念・目的とする「実践真宗学研究科（実践真宗学専攻）」の設立（2009（平成21）年4月）に至るのである。



### 文学部時代－大学院開講「海外研修科目」の整備－

実践真宗学研究科長在任（2013 年 4 月～2015 年 3 月）中に、大学院開講「海外研修科目」を整備する機会があった。

2014 年度に文学部（大学院）教学改革が行われた。その成果の一つが、教学の海外展開・国際交流－教育研究のグローバル化－の一層の活性化実現を狙いとする「海外研修科目」の充実策である。すなわち、北米拠点（龍谷大学バークレーセンターRUBeC）活用プログラムとハワイ研修（ハワイ別院、ヒロ別院、仏教研究所 BSC、ハワイ大学等を拠点とする）プログラムの統合的再編科目「真宗伝道学特殊研究」（両プログラムの隔年開講。開講形態：通年/集中/海外研修科目/4 単位）がスタートした。従来、二つのプログラムは、その成立経緯が異なる事情もあって別個の科目（「真宗学特殊研究」「伝道学特殊研究」）で実施されていたが、科目としての関連性も薄く、不開講の年度もあった。これを一つの科目に統合して毎年開講とし、併せて文学研究科全専攻へ、さらに実践真宗学研究科にも開放した。

真宗における海外伝道の意義を歴史的・教学的視点より明らかにするとともに、21 世紀北米・ハワイにおける伝道の実態研究をとおして、異文化社会における伝道の展開やその課題について学び、真宗伝道学・実践真宗学の海外展開（国際伝道）の可能性を総合的に探究することが、本科目の趣旨である。ひいては国内伝道再検討への視座を学ぶ機会ともなる。

それを受けて改革初年度に当たる 2015（平成 27）年度は北米拠点活用プログラムを、続いて翌 2016 年度にはハワイ研修プログラムをそれぞれ担当した。こうした海外研修講座の充実策を容易に図ることができたのも、直近では川添泰信先生、溯ると武田龍精先生、矢田了章先生たち先学の弛みない耕田と種蒔きのご努力の賜物である。学恩に感謝したい。

ちなみに、研修の受け皿の一つである北米拠点について触れておく。2006 年に浄土真宗センターJSC が開設され（8 月）、それにともない龍谷大学バークレーセンターRUBeC が立ち上げられた。RUBeC は龍谷大学の海外研修センターとして北米における教育・研究の拠点としての役割を担うものである。龍谷大学のブランチャとしても位置づけられている米国仏教大学院 IBS もこの JSC 内に移設され、国際真宗学研究の発信拠点として展開されている。

### 龍谷大学三百五十年史執筆について－資料の収集から執筆まで－

最後に、大学史執筆のことについて述べなければならない。この年史執筆のことは、実は私の短大時代に属するも、ここでは別途独立させて書き記してみたい。

今日、『龍谷大学三百五十年史』通史編上下 2 巻、史料編 5 巻が上梓されている。1989（平成元）年に創立 350 周年を迎えるに当たって、その記念事業の一環として大学史の編集出版事業が立ち上げられた。私は当初からその執筆担当を命じられていた。当時、編集委員会の長は日野昭文学部教授であった。その後、委員長は同じく文学部教授の福間光超先生、そして福嶋寛隆先生へと受け継がれた。委員長の交代は、編集作業の大幅な遅延に由るものである。その間の事情、出版までの経緯については、『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻（2000（平成 12）年 3 月 31 日発行）の「編集後記」に福嶋編集委員長が詳しく触れておられる。

ともあれ、通史編上巻の大幅な遅れ（通史編下巻は 1998（平成 10）年 3 月 31 日発行）については、執筆者の一人である私もその責任の一端を負っている。原稿の作成が遅々として進まず、提出が遅れに遅れた結果である。1999 年に入ってからのある日、大宮学舎の福嶋研究室に呼び出され、委員長福嶋先生から笑顔で厳しく叱咤激励された。恥ずかしい話ではあるが、執筆速度がギアチェンジしたのは、その時からである。福間先生の急なご逝去を受けてその後を継がれた福嶋先生の責任感は想像を超えるものがあったと拝察する。

経済学部・経営学部・法学部等を中心に構成された通史編下巻が、第 2 次大戦後新制大学となってからの龍谷大学の「文科系」総合大学への発展の歴史を語るものに対して、上巻は龍谷大学の原点に立ち帰って学寮の創設と展開（学林時代）、明治期以降の近代化の歩みと戦



後新制大学となつてからの動向（学校時代・単科大学時代）、が文学部の歴史を中核として叙述されている。その中で、私に割り当てられたのは、第三章学校時代の第九節「宗学と安居」、第四章単科大学時代の第四節「真宗学の展開」であつた。ちなみに学林時代宗学の歴史は普賢晃壽先生と浅井成海先生が、学校時代（大教校・大学林・仏教大学）及び単科大学時代（龍谷大学）の宗学・真宗学については信楽峻麿先生と龍溪が、それぞれ執筆担当となつて出発した。私が粗原稿を書き、信楽先生の加筆補訂を踏まえて再度書き直すという段取りであつたが、私の原稿が遅れてしまい、そのうち信楽先生は学長職に就任された。先生から一言「あなたに一任する」といわれ、単独での執筆となつてしまったのである。汗顔の至りであつた。

担当した箇所は、主題的にいえば「宗学・真宗学の近代化の歴史」である。明治期以降の親鸞解釈の歴史を扱う「近代真宗教学史」を研究分野とする私にとって、身近で書きやすい作業ともいえる。しかし、個人の研究発表の場ではないから、できる限り価値中立的叙述を心がける必要がある。だがその一方で、この教学史という分野は研究者の親鸞理解、学問観、歴史認識が問われ、文字どおり価値中立に終始するということはいへない。さらに大学史といえども、最新の学術水準を保持する必要性もある。執筆に際して最も苦労した点であつた。ともあれ、近代～現代にかけての宗学・真宗学の歴史を、「前田慧雲に始まる歴史的研究を主軸とする客観的研究の学風」の形成・発達史として叙述した。

編集委員会からは、下限を、龍谷大学が総合大学への道を歩み始める 1961（昭和 36）年（経済学部開設）前後とするように、と当初よりいわれていた。しかし、龍谷大学真宗学の歴史を教学史の視点から点検する時、少なくとも 1970 年代中頃までを視野に入れないと一定程度まとまった評価と叙述はできない。コッソリと掟を破ったことを、すでに時効も過ぎているかと思うので、この誌面をお借りして告白しておきたい。

なお、必要な資料等については、その収集は執筆者個々で行う必要があつた。開室されたばかりの大学史資料室で年表のコピーだけは入手し、あとは大宮図書館に足を運んで検索した。創立 300 周年（1939（昭和 14）年）を記念して建てられた、あの旧図書館（1936 年落成）である。地下防空壕のように幾層にも複雑に入り組んだ書庫の中で、悪戦苦闘したけれど、時に予期せぬ発見と出会いもあつたことは、今となつては懐かしい経験である。

20 年後には四百年史が編集されることであろう。三百五十年史が世に出て以降、学林時代、学校時代、単科大学時代を対象とする研究は随分と進捗している。加えて、1960 年代以後の総合大学時代となつてからの半世紀を超える歩みも、「現代真宗学」として当然対象に入つてこよう。その中には「実践真宗学」も含まれる。どのような一貫した学問史の物語が、そして龍谷大学史全体像が叙述されるだろうか。

### おわりに―「誰一人取り残さない」大学を願いつつ―

冒頭に記した退職辞令交付式での入澤学長のお話に、新型コロナウイルス感染症という経験したことのない状況の中で、その感染拡大予防策を整備する中での大学教育の在り方に触れられていたと記憶する。それから 1 年が経とうとしている今、状況は厳しくなつてきている。大学執行部をはじめ教職員の皆様のご心労は、量り知れないものがあるろう。龍谷大学がこの困難で閉塞的な社会環境の中にあつて、建学の精神を基盤とする「誰一人取り残さない」教育活動を推進されんことを願っています。

同日

普行『史報』十一号頭注参照。  
曇龍『史報』十二号頭注参照。  
玄肅『史報』十八号頭注参照。

一於学林例年之通研究一昨日有之候処、普行<sup>※</sup>舎中より曇龍<sup>※</sup>舎中江、一心と申義二付、初一念計哉、臨終迄相統致し候歟と相尋候処、一心ハ一念、二念ハ報謝と相成候旨答候二付、一心則信心ニ候得ハ、相統無之<sup>而</sup>ハ難叶申二付、玄肅<sup>※</sup>方相統無之<sup>而</sup>ハ不相成、何分左様之義<sup>者</sup>止ニ致し候様申候得共、尚双方問答致候二付、普行相統無之<sup>而</sup>ハ不相成候、何分右様之論相止候様申二付、曇龍此処ハ研究致候処と申二付、夫より同人普行と之問合議論ニ相成落着不致、明十三日又々研究と申事ニ相成候由。夫ニ付所化共双方舎中あれはレ寄合種々申合候模様ニ付、何分上席之議論故、何れニ致し候<sup>而</sup>も大衆有之事故、人我相加り候間六ヶ數可相成、御用僧<sup>※</sup>焰善寺・興元寺示談、勝縁房取扱被仰付候<sup>而</sup>ハ如何。長御殿限御聞込之次第第二<sup>而</sup>、御用僧之事故、御沙汰有之度、昨日興元寺申出ル。依<sup>而</sup>談之上相伺候処、勝縁房<sup>江</sup>沙汰可致被仰出。昨夕少進宅<sup>江</sup>昨日之研究之様子一寸承り候。大行ニ相成候<sup>而</sup>ハ不宜、何卒内研究ニ致し談合候ハ、早ク相分り可申、双方程克申談ニ相成様取扱可致、趣意も篤<sup>与</sup>ハ不承候へ共、此方共申談之趣申入候旨申聞ル。一昨日之模様咄有之内、研究ニ致し候<sup>而</sup>も、夫々舎中へヶ様ニ相成候と申儀不申聞候ハ<sup>而</sup>ハ不相成。尚慶恩も内々心得を以聞探し可申旨ニ<sup>而</sup>引取、今朝慶恩面会之由同人了簡承り候処、双方共不宜。明日ハ自分出席、双方もミ合セ候由申居候得共、所詮同人力ニハ参り不申、先同人者夫ニ<sup>而</sup>ハ分れ、如何致候哉と存居候処へ、玄肅外用ニ<sup>而</sup>来り候由。右之咄掛ヶ致し、如何被致候哉と申候処、私方惡敷旨申候へハ可宜<sup>与</sup>申候二付、普行も右之旨申聞。尚慶恩之申居候趣申

閱寮 学寮に設けられた所化が講義以外で使した建物か。

巧便『史報』十八号頭注参照。

聞候処、夫ハ中々出来不申。夫方ハ是方曇龍相招、内談致し可申旨承<sup>（歌カ）</sup>輕申居候由。何れ相分候ハ、可申上。右ニ<sup>而</sup>相済候へハ重畳之事ニ候旨勝縁房申出ル。

六月十四日

一勝縁房申出ル、学林研究一条十三日御日中後閱寮<sup>江</sup>普行・巧便等集り、玄肅<sup>方</sup>信心相統之一条<sup>者</sup>相止可申<sup>与</sup>申出候所、兩人共大ニ立腹承知無之。夫々種々申談、一向曇龍相招き申談可申旨ニ相成。曇龍相招き信心<sup>者</sup>初一念計り二限、其上御礼報謝称名<sup>与</sup>承候様ニ存、則被申述候<sup>与</sup>存候、左様ニ候哉<sup>与</sup>尋候所、信心初一念二限<sup>与</sup>申義二<sup>者</sup>無之、信心<sup>者</sup>尤臨終迄通り候事<sup>与</sup>申二付、左候得<sup>者</sup>同意<sup>与</sup>申事ニ相成候。則昨十三日研究席ニおゐて玄肅出席、何れ始り不申前二信心相統之一条申談決着相附候。拙僧者不弁二付、普行<sup>江</sup>頼置候間、委曲可被申述旨演説。引統普行方曇龍被談合、決着之趣大衆<sup>江</sup>演説有之、程克相治り候旨。尤普行演説畢<sup>而</sup>曇龍<sup>江</sup>右之通りニ<sup>而</sup>宜哉<sup>与</sup>申入候所、何角少々申居候得共、小音ニ<sup>而</sup>一同<sup>江</sup>者不聞趣候得<sup>者</sup>、何分右ニ<sup>而</sup>相済候趣、因ニ申居候事。

六月廿二日

二拾九夏

豊前宇曾村

円照寺

一願書 一四四番

随惠義

得業兼主議

從來無懈怠学業出精仕候。尤御宗部を正<sup>与</sup>致し、猶亦兼学も仕り居候。就右、乍恐此度上三祖之御聖教兼学之内三十三過

本作法ニおゐて御試問被仰付被下置候ハ、本人<sup>者</sup>不及申拙僧共ニ迄重畳難有仕合奉存候。何卒此段偏ニ御取成奉願上候。以上。

得業兼主議『史報』十号頭注参照。  
上三祖『史報』十三号頭注参照。  
三十三過本作法

因明三十三過本  
作法。一説に興  
福寺喜多院の林  
懷の著。仏教論  
理学の論証のう  
ち、生じやすい  
過失三三カ条に  
ついて略説した  
もの。  
著年 『史報』十  
三号頭注参照。  
蘭溪 肥前国高来  
郡諫早市中川床  
西林寺。  
上座 『史報』十  
四号頭注参照。  
黙了 日向国那珂  
郡飫肥城下浄念  
寺。  
藤満 『史報』十  
四号頭注参照。  
宝山 近江国犬上  
郡彦根純正寺。  
正信念仏偈 『史  
報』十四号頭注  
参照。  
玄道 石見国那  
賀郡小笹村万泉  
寺住。

天保九年  
戊戌六月  
同国 耆年 蘭溪  
同 上座 黙了  
同 藤満 宝山  
学林  
御役所  
一同  
復十八夏  
五十三  
右同断。其中正信偈念仏偈練磨仕罷在候。右之内ニ而御試問  
被仰付被下候ハ、難有奉存候旨。  
年号  
同日 同所宛  
同国 上座 玄道  
同 藤満 兎謙  
越後 上座 普聞  
一同 廿八夏  
百八十四  
越中野町村報光寺 得業 仁識義  
右同断。御宗部を正与し、兼而者華嚴・天台・真言等ニ相亘り  
粗研究仕居候。其中四帖疏兼学中ニおゐて者 仏心印記・八教  
大意 杯者別段心得置候間、右之内ニ而御試考被仰付被下度旨。  
天保九戌年六月  
越中 全富  
同 一了  
ミノ 舜應

兎謙 不詳。  
四帖疏 『史報』  
十七号頭注参  
照。  
普聞 近江国大  
津泉福寺住。興  
隆・僧朗の二師に  
従う。  
仏心印記 天台  
伝仏心印記 元の  
懷則の著。教観双  
修の天台性悪法  
門の優位を主張  
した書。  
八教大意 天台  
八教大意。唐の灌  
頂の著というが、  
六祖湛然の弟子  
明曠の作か。中国  
天台の教観二門  
の概要を述べた  
もの。  
全富 不詳。  
一了 越中国砺  
波郡杉木新町真  
光寺住職。得業。  
舜應 不詳。  
浄土論 往生論  
とも。無量寿經優

学林御役所  
一同 十七夏ノ  
五十五  
右同断。御宗部を正与致し、兼而者華嚴・法相等ニ粗研究仕罷  
在候。其中浄土論并出入二門偈別段研究仕罷在候ニ付、右之  
内ニ而御試問被仰付候ハ、難有奉存候旨。  
年号  
同日  
同所宛  
一同 十九夏  
十八番  
右同断。御宗意研究仕居候所、此度出入二門偈ニおゐて御試  
問被仰付被下置候ハ、難有奉存候旨。  
年号  
同日  
同日 耆年 蘭溪  
同 上座 黙了  
同 藤満 宝山  
一同 二十八夏  
三百七十二  
右同断。正三者正信偈之中御試問被仰付被下度、兼而者年来書  
学執心練磨仕居申候。御試被為成下度旨。  
年号  
出羽 藻林



|                |                    |           |                 |
|----------------|--------------------|-----------|-----------------|
| 波提舍願生偈。天       | 月日                 | 筑前        | 珠山 <sup>※</sup> |
| 親（世親）の造と       |                    | 日向        | 黙了              |
| いう。            | 同所宛                |           |                 |
| <b>入出二門偈</b>   |                    |           |                 |
| 『史報』十六号頭       | 一同                 | 摂州西川原村西光寺 |                 |
| 注参照。           | 十八夏                | 藹満        | 善好義             |
| <b>中座</b> 安居懸席 | 二百十九               |           |                 |
| 夏数が七夏已下の者。     | 右同断。其中入出二門偈練磨仕罷在候。 |           |                 |
|                | 右之内ニ而御試問被仰付被下度旨。   |           |                 |
| <b>巧阿</b> 河内国交 | 年号                 |           |                 |
| 野郡野村極樂寺。       | 月日                 | 越後 上座     | 玄道              |
| <b>入蔵</b> 豊後国日 |                    | 同 上座      | 薩音 <sup>※</sup> |
| 田郡川原村正専        |                    | 同 上座      | 普聞              |
| 寺次男。           | 同所宛                |           |                 |
| <b>藻林</b> 出羽国村 |                    |           |                 |
| 山郡天童村善行        | 一右ニ付御用懸り伺左之通り。     |           |                 |
| 寺住。            | 正学試論題              |           |                 |
| <b>珠山</b> 不詳。  | 一三祖御聖教             | 豊前        | 随恵              |
| <b>薩音</b> 摂津国島 | 傍明正明               |           |                 |
| 上郡東五百住村        | 二道分斎               |           |                 |
| 善照寺。           | 五念具闕               |           |                 |
|                | 一四帖疏               | 越中        | 仁識              |
|                | 所帰三宝               |           |                 |
|                | 得恩所在               |           |                 |
|                | 就人就行               |           |                 |
|                | 一正信偈               | 豊後        | 古明              |
|                | 法蔵位次               |           |                 |
|                | 業因通局               |           |                 |
|                | 報化二土               |           |                 |

|            |         |    |
|------------|---------|----|
| 一正信念仏偈     | 摂州      | 了空 |
| 七祖選由       |         |    |
| 五願配不       |         |    |
| 三信三不       |         |    |
| 一入出二門偈     | 豊前      | 宣明 |
| 入出往還同異     |         |    |
| 因果五門       |         |    |
| 他利利他       |         |    |
| 一入出二門偈     | 摂州      | 善好 |
| 建章先後       |         |    |
| 乗種不生       |         |    |
| 七祖出沒       |         |    |
| 一浄土論及入出二門偈 | 河州      | 龍暁 |
| 五念分斎       |         |    |
| 觀察大旨       |         |    |
| 起観生信       |         |    |
| 兼学試論題      |         |    |
| 一仏心印記及八教大意 | 越中      | 仁識 |
| 八教尽未       |         |    |
| 三諦勝劣       |         |    |
| 真妄観境       |         |    |
| 一三十三過本作法   | 豊前      | 随恵 |
| 此因非有       |         |    |
| 若法為同       |         |    |
| 順憬違決自許     |         |    |
| 一試問願左之通り   |         |    |
| 助教願        | 豊前      |    |
|            | 宇曾村 円照寺 |    |
|            | 随恵      |    |

|      |       |     |    |          |      |     |       |       |    |      |          |      |    |      |          |    |      |       |     |    |       |                                                                                                        |    |                                                        |       |                                                                                                                     |                        |
|------|-------|-----|----|----------|------|-----|-------|-------|----|------|----------|------|----|------|----------|----|------|-------|-----|----|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|--------------------------------------------------------|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|
| 右同断。 | 越中野町村 | 報光寺 | 仁識 | 豊後天間村正円寺 | 弟 古明 | 得業願 | 豊前安雲村 | 光林寺次男 | 宣明 | 右同断。 | 摂州河辺郡杭瀬村 | 西光寺住 | 了空 | 右同断。 | 同西川原村西光寺 | 善好 | 右同断。 | 河州新庄村 | 浄円寺 | 龍曉 | 六月廿四日 | 一昨年八月御用掛り方伺有之候所化落席致し候者再懸籍御取扱方、追而沙汰之趣ニ而伺帳相預り有之。尚昨十二月同様之義所化中々願書差出し、同様預置ニ相成有之候。右伺帳願書御用僧正定寺江相渡し、勘考致可申出旨申渡。 | 同日 | 一学林方選挙ニ付、伺書六通并論題伺帳過日御用掛り差出候ニ付、筆記致し御用僧江相渡し、取調并論題勘考申付候事。 | 六月廿八日 | 一勸学六人限と先達而被仰出候処、其前二十一人ニ相成有之。<br>※其内杳旭・性海・普嚴ハ往生、残八人有之処、玄肅・廓忍・自謙・興隆老衰最早難相勤候ニ付、役名をさしふき居候而者跡選挙之障りニ相成候ニ付、右四人申合有之退役可願処、其義 | 杳旭 越中国下新川郡魚津町照頭寺住。勸学。僧 |
|------|-------|-----|----|----------|------|-----|-------|-------|----|------|----------|------|----|------|----------|----|------|-------|-----|----|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|--------------------------------------------------------|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|

|      |                       |                |                |                          |                 |                |                   |                                  |                   |
|------|-----------------------|----------------|----------------|--------------------------|-----------------|----------------|-------------------|----------------------------------|-------------------|
| 鑑門人。 | 性海 和泉国堺万福寺住。勸学。堺空華の祖。 | 普嚴 『史報』二号頭注参照。 | 廓忍 『史報』士号頭注参照。 | 自謙 石見国邇摩郡湯里村瑞泉寺住。文政七年勸学。 | 興隆 『史報』十一号頭注参照。 | 司教 『史報』一号頭注参照。 | 左司馬 『史報』二・十号頭注参照。 | 僧鑑 安芸国広島中島新町善福寺第十四世住職。天保十一年年預勸学。 | 助教兼主議 『史報』十号頭注参照。 |
|------|-----------------------|----------------|----------------|--------------------------|-----------------|----------------|-------------------|----------------------------------|-------------------|

|                                                                                                                             |          |        |       |           |        |       |          |        |       |                                      |           |        |          |           |        |          |           |        |       |                     |            |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|--------|-------|-----------|--------|-------|----------|--------|-------|--------------------------------------|-----------|--------|----------|-----------|--------|----------|-----------|--------|-------|---------------------|------------|
| ハ人情ニ而、勸学之俛命終致度、依而偽ニ申前キ「相」相掛候と申次第二相成様致し度、左候へハ残り四人ニ相成候ニ付、司教之内より御操上ケ相願度、則勸学等示談之上、別紙之通伺候旨。夫ニ付司教へ助教之内方操上候様左司馬方差出。<br>可任勸学人牀左ニ奉伺。 | 一芸州沼田郡廣嶋 | 當時 善福寺 | 司教 僧鑑 | 一越中婦負郡茗荷村 | 當時 妙覺寺 | 司教 巧便 | 一肥后飽田郡熊本 | 當時 善正寺 | 司教 慶恩 | 右三人之内ニ而兩人勸学可被仰付候而可然哉。<br>可任司教人牀左ニ奉伺。 | 一越後頸城郡河原村 | 當時 正念寺 | 助教兼主議 惠麟 | 一越中新川郡中嶋村 | 當時 勝善寺 | 助教兼主議 印持 | 一筑前嘉磨郡臼井村 | 當時 長源寺 | 助教 寶雲 | 右三人之内兩人司教可被仰付候而可然哉。 | 六月廿八日 御用掛り |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|--------|-------|-----------|--------|-------|----------|--------|-------|--------------------------------------|-----------|--------|----------|-----------|--------|----------|-----------|--------|-------|---------------------|------------|

## 【補注】

### ① 昨年八月御用掛り

天保八年（一八三七）八月、近年の不況により、経済的余裕がなく、続籍できずに落籍した所化が、再懸席を希望していたものと考えられるが、該当する所化は不詳である。それに関連して、同年十二月十六日には、落席者は懸籍年数を減らし、また階級に応じた上納により復籍を認めてほしいとの願書が出されている。学林の懸席所化は、そのほとんどが寺院の次男・三男であったため、学林において修学する意志があっても、経済的に余裕がないのが実情であった。これに不況が重なり、落席した所化が多くいたと考えられる。これらの伺帳と願書が預かりのままとなっており、この時点で御用僧へと渡り、検討段階に移っている。

### ② 勸学六人限と先達而被仰出

三業惑乱以降、学林を統括する能化職が任命されず、文政七年（一八二四）正月二十三日に複数人の勸学職が任命されるようになった。同年五月二十二日に勸学のうち一人を、夏末から翌年の夏までの間在寮する年預勸学とし、学林を統括させた。しかし、在職中に老齢化し病気がちとなり、その職務を遂行できなくなることが多くなった。そのため、天保九年（一八三八）七月十二日に本山からの達書により、老齢で病気がちであるものは、辞職するのではなく、定員外として勸学職に留まらせるようになった。これが員外勸学制である。

## 【解説】

本号掲載分の『学林諸記』は、以下の通りである。

前号掲載分からの続き、六月十二日条では、一昨日十日に学林で行われた「研究」の場で起こった、普行と曇龍による教義上の論争について記されている。ここでいう「研究」とは、各学派ごとの塾で行われる学習会のようなものと考えられる。論争のあらましと論点は次の通りである。普行の舍中から曇龍の舍中に対し、「一心」の解釈について、一念に限るのか臨終の際まで続くものなのか尋ねたところ、曇龍いわく「一心」は一念二念は仏への報恩感謝になると答えたため、

普行が「一心」は信心であるため、相続していくものでなくてはならないと言いつ返した。このことに勸学の玄肅は、「一心」は相続していくものでなくてはならず、このような議論は止めるよう仲裁したが、尚も双方とも問答をやめず、普行は繰り返し信心相続と、この議論の収束を訴えたが、曇龍がこゝは研究をすべきところであると主張し、結局議論は落着かなかった。十三日に再び研究が行われる運びとなり、双方の舍中に所化たちが集まり、あれこれと話し込む様相であった。堂達衆で話し合い、勝縁房がこの相論の仲裁を担うことになった。この相論が大事になる前に、内々に解決するよう慶恩が働きかけたが、両者の賛同は得られず、普行は曇龍を招待しての内談に应じる方向で調整されることになった。

続く六月十四日条では、この相論の顛末が記されている。六月十三日、閑寮に普行・巧便等が集まり、玄肅から信心相続の一件は止めにするようにとの申し出があったが、普行・巧便両者とも大いに腹を立て、承服しなかった。一向は相談の上、曇龍を招いて議論することになり、曇龍に対して、改めて確認のため、信心についての見解を尋ねなおしたところ、信心は一念に限るということではなく、臨終まで続くものだとの回答であった。これは、普行等の意見に同意したのも当然であるため、信心相続の一件はこれで決着となった。大衆に対して相論の詳しい経緯と決着について、普行から演説がなされた後、曇龍に演説の内容に相違ないか確認したところ、曇龍は何か思うところがあったようだが、声が小さすぎて大衆には聞こえず、そのままこの相論はあえなく決着となった。

六月二十二日条では、三名の助教願と、四名の得業願が出されている。

六月二十四日条では、昨年の八月に伺いを立てた所化が落籍し、再度の懸籍を取り計らう伺帳が、追って沙汰するとの方針で預かりになっていた。また昨年十二月にも同様の件で所化中から願書が提出されていたが、こちらもまた預かりのままとなっていたため、先の伺帳と願書を御用僧の正定寺に渡し、熟慮し検討するよう申し渡されている。

続く同日条では、学林より選挙のことについて、伺書六通と論題の伺帳が過日、御用掛から差し出され、筆記して書き留め、御用僧に渡し、取り調べと論題の勘考が申し付けられている。

六月二十八日条は、員外勸学の制度成立に関する前日譚である。勸学は設置当

初、六人にその定員が定められていたが、その後十一人となり、その内すでに三人が死去。残り八人のうち、四人が老衰のため職務の遂行が困難な状況となっていた。本来なら次期勸学職の定員を確保するため、老衰の四人は退役を申し出るべきところだが、人情により勸学職に就いたまま臨終を迎えられるよう手配する運びとなった。そのため、務めにあたることのできる勸学は、実質残りの四人のみとなるため、司教から勸学への人員の繰り上げ願いが、勸学相談の上伺いがたてられ、それに伴い、助教から司教への人員の繰り上げ願いについても、左司馬から差し出されている。勸学・司教両職共に、三名の候補者がたてられ、その中から二名が選ばれることになっている。

以上が、今号掲載分の『学林諸記』の内容である。前半部分における「信心相続の一件」は、当時学林における一大学派となっていた空華派と、それを凌ぐほどの勢力に成長する龍華派の祖である曇龍の、教義上における見識の相違の一端が垣間見える内容となっている。

※本文の翻刻・解説は西尾大樹（本学大学院修士課程）、頭注・補注については小松正弥（本学大学院博士後期課程）、安達恵祐・宮崎緑（本学大学院修士課程）が担当した。



## 【表紙解説】

今から約 100 年前、大正 8 年末から 9 年初頭にかけて流行性感冒（通称スペイン風邪）が蔓延していたことはご存知でしょうか。本号で掲載している表紙の資料は、当室所蔵の大正 8 年度『立案裁決綴』と『執務日誌』であり、本学が仏教大学と称していた当時の大学当局の対応が記録されている。

『立案裁決綴』には大正 9 年 1 月 26 日に、「臨時休業ノ件 悪性感冒流行ノ為メ本週中（明火曜日ヨリ）臨時休業ノ方同上」と、悪性感冒（流行性感冒）のため休講措置が取られている。詳細は『執務日誌』の大正 9 年 1 月の記録から窺える。冬期休業明けの 1 月 19 日月曜日に帰省先から戻る学生が少なく、翌 20 日から学生に対し予防注射の希望者を募っており、注射を希望する教授もいた。また、流行性感冒のために休学する者も続いており、中には入院する学生もいた。感染が拡大している状況から、26 日月曜日には疾患者と欠席者の数を調査し、その結果を踏まえてか、同日に 27 日火曜日から 31 日まで 1 週間の休業措置をとることが決定された。

また、同日には「明朝勤行後舎生ニ対シ群集ニ近寄ル等一層注意シ、避ケテ、休暇ニセン本意ニ反セヌ様注告スベク学生監ヨリ命ゼラレ、且ツ休暇中常ニ病者ノ容態など新病者ノ有無ヲ注意シ敏活ニ行動スベク話サレタリ。」と、休業時の学生に対して、群集に近寄ることを注意して避けると共に、患者に注意を払うように通達されていた。休業措置をとることや密を避けることは、今日も行われていることであり、当時の大学当局の危機意識の高さが窺える。

今年（令和 2 年）度の本学は、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19 と表記する）の対応を講じている。4 月に緊急事態宣言を受け一時休講の措置を取った後、第 1 学期は全面オンラインによる開講の対応に移行した。第 2 学期からは講義内容を鑑みて対面とオンライン形式を併用している。また、学内では学生証等を用いた入校管理や除菌シートの配布・教壇へのアクリル板の設置など徹底した防疫対策がなされている。対面授業においても配慮を要する学生へのオンライン対応や配信にあたって教員の技術的なサポートなども行っている。例年卒業論文の口述試問は従来各教授の研究室での対面形式であったが、同様にオンラインにて行った。図書館や自習室も COVID-19 の対策を取りつつ利用できるようにしている。また、大学の行事としては、昨年度の卒業式と今年度の入学式は中止となってしまったが、卒業式・修了式は入場制限や安全対策を講じた上で挙行了した。大学当局は厳格な COVID-19 の対策を取りつつも、学習・研究面にも配慮していると看取できる。

（安達恵祐）



### 『龍谷大学三百五十年史』通史編 上巻・下巻、史料編 第一巻～第五巻

- 体裁：A5 判／布クロス上製本／箱入
- 定価：各 1 冊 5,000 円（消費税別）
- ご注文は大学史資料室まで、FAX または書面にてお願いいたします。
- 送料：有料（送料の実費をご負担いただきます）。

## 資料室だより

資料保存作業として、以下の作業を継続しておこなっています。

- ・事務文書綴の修復、所蔵資料の調査・目録化
- ・『立案裁決綴』のマイクロフィルム化と紙焼写真の製本、その他所蔵資料の製本
- ・1918年から1920年にかけて世界的に流行した新型インフルエンザ（俗称 スペイン風邪）当時の確認できる本学史料を今回の21号表紙に掲載、解説を付しました。
- ・大学史資料室 URL は、以下のとおりです。QR コードも公開します。

[https://library.ryukoku.ac.jp/?page\\_id=274](https://library.ryukoku.ac.jp/?page_id=274) ※15 号より、『龍谷大学史報』は Web 版での発行となっています。



編集・発行

龍谷大学大宮図書館（大学史資料室）

2021 年 3 月 23 日発行

[https://library.ryukoku.ac.jp/?page\\_id=274](https://library.ryukoku.ac.jp/?page_id=274)

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1

電話：075-343-3311（内線 5114） FAX：075-343-3362